

人類の析出に向けて（２）

—ニアンザピテクス—

石田 英實

北ケニアのナチョラ地域の化石産地からは、現在までに２種類の中期中新世類人猿が発見されている。そのひとつは前号で紹介したケニアピテクスであり、他のひとつは今回紹介するニアンザピテクス(*Nyanzapithecus*)である。

ケニアピテクスの大きさは、ほぼピグミーチンパンジー（最近「ボノボ＝Bonobo」と呼ばれる）に相当するが、ニアンザピテクスはそれよりも小さく、比較的大型のテナガザルに似る。この仲間はこれまでにビクトリア湖の北東にあたる西ケニアの小さな湾、ホマ湾に浮かぶふたつの小島から２種が知られ、その１種、*N.ヴァンクーバリング*(*N.vancouveringi*)はルジンガ島から、他の１種*N.ピックフォルディ*(*N.pickfordi*)はマボコ島から産出している。それら以外は北ケニアのわれわれの調査地、ナチョラの中期中新世に属する約1,500万年前のアカ＝アイテプス累層からのみ発見されている。これらの化石は、そのほとんどが遊離歯であり、顎骨の破片が若干含まれる。この小型類人猿の興味深い点は、ケニアピテクスと同様にやや乾燥した環境に適応することに加え、イタリアで発見された謎めいた高等霊長類、オレオピテクス(*Oreopithecus*)の祖先型と考えられること、さらにナチョラ産化石は新種の可能性が高いことである。

オレオピテクスは、前世紀の後半にイタリア・トスカーナ地方西部の褐炭層から発見された約900万年前の高等霊長類で、フランス人ポール＝ジェルヴェによって報告された。ジェルヴェはこの化石をオレオピテクス＝バンボリ(*O.banborii*)、つま

り「バンボリの山ザル」と命名した。それ以降、同じトスカーナ地方南西部の数ヶ所からも発見され、標本数が増加し、とくに1950年代にはスイスの古生物学者ヨハネス＝ヒュルツラーの精力的な調査により、オレオピテクスの全身骨格も発見された。霊長類化石の発見は容易なものではないが、この仲間の化石標本は比較的充実しているといえる。しかし、その系統的位置づけについては百家争鳴の感があり、系統的帰属先が旧世界ザル、類人猿、はたまたサルから類人猿への移行型、そしてずっと古くに分岐した生き残りであるなど意見が出尽くしている。現在もすべての研究者の意見の一致を見ているわけではない。これはオレオピテクスの形態のユニークさに原因がある。

そのユニークさとは進化的な新旧の形態が入り交じっている点にある。もっとも新しく、進んだ形態としては下顎の第1番目の小白歯（通常は「P3」、第2番目を「P4」と呼ぶ）に見られるヒトと同じような2個の咬頭である。これは現生のゴリラやチンパンジーにもまだ見られない特徴である。犬歯が小さいこと、したがって歯隙がないこと、さらに短い顔面部や比較的丸い頭蓋などもヒトに似た新しい形態である。もっとも古い形態としては下顎の大白歯でパラコニッドと呼ばれる咬頭（近心＝舌側咬頭）の存在であり、これは旧世界ザルにも類人猿にもすでに消失して見られない。さらに下顎の大白歯は第6番目の咬頭、セントリコニドを持ち、これはオレオピテクス独特の特徴である。旧世界ザルに似ず、類人猿に似

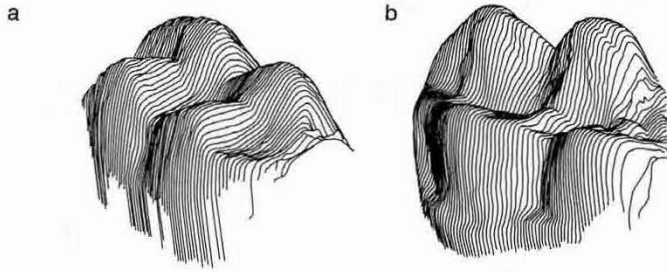


図 1. 旧世界ザル (a) と、類人猿 (b) の上顎大白歯の咬頭と稜線

た中間的な特徴としては、上顎大白歯歯冠の形態がある。オレオピテクスの大白歯は図1-aのような旧世界ザルの双稜歯（パイロフォドント＝近心、遠心のそれらで発達した稜で舌側と頬側の咬頭が連なる形）ではなく、図1-bのように近心＝舌側の咬頭が斜めの稜で連なる類人猿の形態を示す。体のつくりについても類人猿的で、樹上性が強く、頻繁な木登りや枝からのぶら下がり行動がうかがわれ、歯の形状からは、十分な咀嚼を必要とする食性を推定できる。

オレオピテクスの系統上の位置は今も確定的ではないが、体のつくりが現生の類人猿に似ることを重視し、ヒト上科に入れる意見が重要である。しかしあまりに特殊化しているため、オレオピテクス科という独立の科が与えられている。

さて、オレオピテクスはどこからきたのか、そしてその祖先とは。この問いへの解答に与えるヒントが上述のようにアフリカにある。それらはグスタフ＝フォン＝ケーニッヒスヴァルトのマボコ島産霊長類化石の研究、「東アフリカの中新世からの中新世オナガザル上科およびオレオピテクス上科」（1969）と、やはりマボコ島からマーチン＝ピックフォードが採集した小型霊長類の歯牙化石に関するニューヨーク大学のテリー＝ハリソンの研究（1986）である。

ケーニッヒスヴァルトはマボコ島産のオナガザル化石を研究中、標本の中に1点だけであったが、このほか奇妙な形をした下顎第3大白歯を見つけた。その頬側の咬頭が内側へ強くずれ、セントリコニドを思わせることから、オレオピテクス

に近い新属としてマボコピテクス(*Mabokopithecus*)の名を与えた。しかしその後マボコ島を再調査したピックフォードは、この大白歯はケニアピテクスの変異で、新属ではないと主張している。

ハリソンはマボコ島産の小型類人猿の上顎大白歯の歯冠が近遠心方向に著しく長く、咬頭も円錐型で非常に強く膨らんでいること、また小白歯も上・下顎ともにP3とP4がよく似た形状であることに注目し、この小型類人猿をオレオピテクスに近い種類と考え、ニアンザピテクスという新属をつくり、マボコ調査に貢献したM.ピックフォードの名にちなんで種名を*N. pickfordi*とした。ハリソンは前述のようにルジンガ島産のラングワピテクス・ヴァンクーパリングもこの属へ加えた。ニアンザピテクスはオレオピテクスよりも数百万年以上も古い。現在のところその祖先型と考えられるようになっている。今後四肢や体幹骨の化石の発見によりその関係がより明白になることが期待されている。

ナチョラ産のニアンザピテクスの歯はマボコ島やルジンガ島産のものよりも小型で、大白歯歯冠の近遠心方向の伸長の度合いもやや弱いことから別種と考えるほうが妥当と思える。これまでに20数個の化石標本が発見されていて、國松豊（京都大学霊長類研究所）がすでに記載をすませ（*African Study Monographs*, 13:237-249）、新種の発表準備を現在行っており、調査隊は来年度より3年計画で発掘と詳細な分析を予定している。

（いしだ ひでみ 京都大学）